

一人一寺・心の寺

井上球二

は、おこがましいとは存じますが、いささか自負もございまして、「金さえかければ、どんな大伽藍でも建つが、無形のを心に建つのは大変なことですね」とおっしゃった方がありました。

一人一人が、心の中に寺を建てましょう。建てたからには、自分は住職ですから、仏一本尊に日々お仕えし、延命十句観音経(略して十句経)を誦えましょう——という運動をはじめましてから、この六月十四日ぐれば、満二年になります。

尼さん方も、伽藍とは別に、心の寺を建てておられ、法友になって下さっているのです。

超宗派運動ですので、各寺の本尊は、阿弥陀如来・大日如来・観音菩薩・不動明王等々と種々です。又、おもしろい事に曹洞・臨済・天台・真言・日蓮・浄土と各宗のお坊さん

超宗派運動ですので、各寺の本尊は、阿弥陀如来・大日如来・観音菩薩・不動明王等々と種々です。又、おもしろい事に曹洞・臨済・天台・真言・日蓮・浄土と各宗のお坊さん

寺には、霊場札所のように番号をつけておりますが、京都の179番久遠山妙法寺、秋山文陽師は九十八歳で、日蓮宗大雪山の住職を五十年やられ只今で隠居という翁ですが、「各宗派は、皆それぞれワクを造っておりますが、一人一寺は宗教の革命であります」といみじくも喝破されております。(私が喝破と書きますこと

おっしゃる通りです。昨日も今日も明日も仏道という道を住職たるの自覚をもって歩みつづけるのですから、私は、一人一寺は、日日教であり、自覚教であると言うのです。

そういう点をいましている和歌山20番正大山妙願寺 横田康二師(昨年二月、当時高校二年生)が、機関誌『心の寺』2号に寄せた文の一部を紹介いたします。

自覚—この自覚、これを以って一人一寺は成り立っているんだと

思います。これは素晴らしい事だけに、一つ緩めば、何が何だか分からなくなるような気がします。本当にウンと気を引き締めて、これからの仏教は、この一人一寺の私にかかっているんだと、大いに奮い立たなければいけないと思います(中略)「心の寺」これを通じて、お互いに切磋琢磨し合わなければ、一人一寺は観念的な一面もあるが故に、昼行灯みたいにポーッとした訳の分らんものになってしまうんじゃないかと思えます。みなさん大いに張り切りましょう(後略)

ここで私の生立ちを極しかいつまんで特急で述べさせて頂きます。

大正六年、広島県尾道市生れ。

幼稚園へは行くまでに、途中で弁当を食べては、しかられ。ひとりポツチで拌みゴツコ?をしているのが好きという変な児^{へん}だつたようですが、家に、お盆にだけ蔵から出して祀る三尊(阿弥陀・葉師・千手観音)の掛軸がありました。幼い私には、頭上に沢山の顔、いっぱい手に色々な物を持った優しいお顔の千手観音が特別に大好きでした。

これを、昭和二十年八月六日、B29の爆撃で火の路地となった中を、これを抱えて逃げるのですが——これはしばらくおきました。

中学四年の夏、山上に庵を編んで、不動明王を祀る老僧から、読みなさいと貸して下さったのが、般若心経

の講話でした。少年の私を強烈にとらえたのは「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」でした。これが役に立つ時が来るようとは——。

昭和二十年七月十二日。戦争末期、阪神間西宮に住んでいたのですが、朝、便所で、ホースから水がピューツと出るような特大喀血をしました。が、空襲に明け暮れの日々です。医者、薬、安静はおろか、食べ特も口クにない状態です。絶対絶命です。ひらき直るより生きるみちはないと思いました。「色即是空」の世界に目を向けました(少くとも必死でそちらを見ようとした) 反対に恐怖心は希薄になったようで、心もやすらぎを憶えてか。その時は、まだ十句経は知りませんでした。が、第三

句・仏と因有り〳〵のとおり、私のい

のちも、根本的には、仏のおんいのちと同じ素因を有していた訳で、第八

四句・佛と縁有り〳〵絶対絶命のところから、はい上らねばという縁によつ

て、大いなるそのいのちの功德が作

用いて、自然治癒力ともなり、命を長らえることが出来たものと思えます。

さきに火の中を逃げたという話は、喀血の日から二十五日目にあたりま

す。
昭和五十四年。職業的にも仏を描くようになっていた私は、千手観音を描き、30センチ四方の小引出しの上に、額に入れて祀り、東大山善慈寺と号しました。そうして当山の境内は間口30センチ奥行30センチとう

そぶいたものです。

昭和五十四年八月末か九月初めで

したが、フトしたことで、白隠禪師

七十五歳の時の著作『延命十句観音

経靈驗記』を読み、白隠の各地を廻

つて、十句経を拈めようとされた姿

勢にうたれ、この本をイラスト入り

で分り易く書いて、世に出し、白隠

さんの意志を継いで、十句経を拈め

よう、と大まじめに考えまして、さ

いわい三学出版の増田社長のご了解

を得て、その大仕事に取組むことに

なりましたが、明治以降現代訳した

人がいないという事なのですから、

全く門外漢の私が訳すなんてことは、

どだい無理なはなしでしょう。

が、もう後へは引けません。そんな

ときの十一月二十日。朝の勤行の

さ中、突然、全く突然、金色燦然た

る光芒の中に千手観音が現われ給う

たのです。私はもう称名し続けるば

かりでした。

この事によって、今、如何に困難

の中に在ろうとも、必ず本は出来る

のだ！との確心を得ました。

そうして、翌、五十五年八月、い

よいよ出版されました。と、九月に、

静岡市の川上六三郎なる人物から、

本を読んだからといって手紙がさま

した。三十六歳・独身・合鍵製造靴

修理業で、この人もまた十句経を拈

めたいという願いをもっていました。

後にして思えば、この出逢いが一人

一寺への道になったのでした。

川上さんは、私の東大山善慈寺に

対して、西山観音寺を建てました。

そこで、二人で『十句経を払めるミニ会』をつくりましたが、申込者が一人もありません。この一人も無いということから、外の人達にも寺を建てて貰い、十句経を唱えて貰おう「一人一寺」とひらめいたのです。年が明けて、五十六年一月十四日、六さん上京し、昼食を食べながらの時のことでした。

斯くして、六カ月後、三島の臨濟宗正眼寺に於いて、一人一寺提唱第一声をあげさせて頂き、ここに第一歩を踏み出したのですが、早や二年になろうとしております。

ここに『心の寺』6号の原稿が来ておりますが、白隠さんの靈驗記の現代版とも言えるようなものなので、概略を紹介します。

永平寺貫主秦慧玉禪師から得度を受けたという神奈川187番松林山不孤庵 佐々木直心師の文ですが、昨年九月二十七日、師の姪（31歳三児の母）が外出先で斃れ、静岡済生病院に運ばれた時は、もう瞳孔が開いていた。脳内血管破裂で、手術後、一命は取り止めたとしても、意識が戻るには一年はかかる、という状態でしたが、師が家族の方に十句経を誦めるようにと拙著を渡された。お姑さんも二人の子供も家族全員一心に誦えた。するとです！十月二十日から容態に変化が現われはじめ、十二月には杖なしで歩行が可能になった！という譚なのです。 観世音 南無仏 合掌

千手観音さまのお手の上の小さな宮殿はなんだか心の寺のような気がして

